



日本古典文庫12

古今和歌集
新古今和歌集

昭和五十一年十二月二十五日 初版発行
昭和五十七年十月四日 四版発行
定価は函・帯に表示してあります

訳者代表 窪田 空穂

装画 福田平八郎

(函絵・山種美術館蔵)

発行者 清水 勝

印刷者 中内康児

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十一番二

振替口座(東京)〇一〇八〇二

電話(東京)四〇四一二〇一(営業)

四〇四一八六一(編集)

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

目次

古今和歌集	窪田空穂訳
新古今和歌集	窪田章一郎訳
解説	大岡 信

古今和歌集

窪田空穂 訳

假名序	……………	三
卷第一 春の歌上	……………	九
卷第二 春の歌下	……………	六
卷第三 夏の歌	……………	七
卷第四 秋の歌上	……………	三
卷第五 秋の歌下	……………	四
卷第六 冬の歌	……………	九
卷第七 賀の歌	……………	三
卷第八 離別の歌	……………	八
卷第九 羈旅の歌	……………	三
卷第十 物の歌	……………	四
卷第十一 恋の歌一	……………	三

卷第十二 恋の歌二	……………	八
卷第十三 恋の歌三	……………	八
卷第十四 恋の歌四	……………	九
卷第十五 恋の歌五	……………	七
卷第十六 哀傷の歌	……………	六
卷第十七 雑の歌上	……………	四
卷第十八 雑の歌下	……………	四
卷第十九 雑体	……………	四
卷第二十 大歌所の御歌	……………	六
墨滅の歌	……………	三
真名序	……………	三

古今和歌集序（仮名序）

一 歌はどういうものか

日本の歌は、人の心をもととして、かぎりもない様々の言葉となつてあらわれたものである。社会に生存している人は、いろいろの事に出会い、いろいろの行いをするものであるから、心に思うことが多いが、その感ずる事を見るもの聞くものに託して言いあらわしたのが歌である。梅の花に鳴いている鶯、清らかな川の水に住む河鹿のたのしげな声を聞くと、一切の生命をもっているものの、どれと云つて、歌を詠まないものがあるうか。生物はみな歌を詠んでいるのである。

力をも入れることなく天地の神々を感動させ、眼には見えない死者の靈魂をも感激させ、男女の關係をも親しくさせ、めつたに感激などしない勇猛な武士の心までもなくさめるものは歌である。

二 歌のおこりと、短歌のなりたち

このような歌は、天地のはじめて創られた時から生まれたのである。けれども、この世に伝わっている上では、

高天ヶ原では下照姫の歌にはじまり、地上では素盞鳴命の歌からおこつたのである。神代には歌の文字の数もまだ定まつておらず、心のままに、すなおに歌つたので、歌われていることの意味も理解しにくいものであつたようである。人間の世の中になつてから、三十一文字の定型短歌を詠むようになった。

三 短歌の発達と、近ごろの有様

このように短歌の形式が定まつたので、花の美しさを愛で、鳥の樂しげなのをうらやみ、春の霞や秋の露の趣に深く感動して歌つた歌は、多種多様なものができて来た。

遠方へゆく旅も、出発する第一歩からはじまつて、年月を経て目的地に達し、高い山も麓の塵からできて、空の雲のたなびくところまで成長しているように、この歌もまたそれとおなじであらう。

あの「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」という歌は、天皇の御代のはじめを祝つた歌である。「安積山影さえ見ゆる山の井の浅きころをわが思はなくに」という歌は、陸奥の采女が戯れのところから詠んだもので、この二首の歌は、歌の父母のように今もなつかしまれ親しまれて、習字をする幼い人が最初に習うものにもしている。

そもそも、歌の体は六つある。唐の詩もこのようであらう。

その六種類の第一には、「そへ歌」がある。

大鶴鶴の帝（仁徳天皇）をなぞらえ奉った歌、

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花（難波津に咲く木の花よ、フユゴモリ今を咲くべき春として咲く木の花よ。）

というのが、それである。

第二には、「かぞへ歌」がある。

咲く花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずて（うつくしく咲く花に心が寄ってゆく身のへまたはつぐみの）、つまらなさよ。からだに病いのへいたつきの矢の入りこむのも知らずに。「思ひつくみ」に小鳥のツグミを詠みこみ、「いたつき」に病気のいたつきと小鳥を射るに用いたいたつきの矢とを掛けてある。）

というのが、それである。

第三には、「なずらへ歌」がある。

君にけさ朝の霜のおきて去なば恋しきごとに消えや渡らむ（君が今朝、朝の霜の置くように、わたしを後に残しておいてしまったならば、恋しいと思うたびごとに、霜の消えるように、心も消えるよ。うな悲しみをしつづけることであらうか。）

というのが、それである。

第四には、「たとへ歌」がある。

わが恋はよむともつきじありそ海の浜の真砂はよみ尽すとも（わが恋の思いのかぎりもないことは、数えても数えつくせないだろう。たとえ、海の浜への砂の数がかぞえつくそうとも。）

というのが、それである。

第五には、「ただごと歌」がある。

偽のなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし（巻十四・七二一の歌）

というのが、それである。

第六には、「いはひ歌」がある。

この殿はむべも富みけりさき草の三つば四つばに殿造りせり（この御殿は、聞いていたように、いかにも富んでいることだ。三棟四棟に殿を造っている。）

というのが、それである。

けれども、今の世の中は、昔の、真実を重んじた時代とはちがって、人のところが派手に、華やかになってしまったために、歌もまたそれに応じて、色めいた甘い歌、真実に乏しい感傷的な歌ばかりが生まれくるので、恋愛をする者どうしの間でひそかに心をかよわすものとなり、地下に埋まった木のように、他人には知られないものとなって、宮中などの正式な席では、おもてだつて

は詠まれぬことになってしまったのである。

四 古代の歌と、歌われた内容

しかし、歌のはじめを思うと、このように墮落した状態ではなかった。昔の代々の天皇は、春の花のうつくしい朝、秋の月の清らかな夜ごとに、侍臣たちを召して、その場合のしかるべきことに関係させて歌を詠ませ、奉らさせた。侍臣たちが、ある時は花をたずねようとして不案内なところに迷い、ある時は月を思うとて案内者もない闇の路にたどって行ったためいめの人の心を、天皇はごらんになって、賢いか愚かかを試されたであろう。歌はこのように宮中の正式な場合に詠まれたけれど、それだけではなく、めいめいが自由に詠むさまざまな歌があった。さざれ石にたとえて君の長寿を祝い（三四三の歌参照。以下おなじ）、筑波山にたとえて君のめぐみを願い（一〇九五）、よろこびが自分の身に過ぎ、楽しみが心一つにありあまる気持を詠み（八六五）、富士山の噴煙に胸の炎をたとえて人を恋い（五三四）、松虫の音に友をしのび（二〇〇）、高砂や住吉の松も自分ともろともに生い立っているように長生きなのを思ったり（九〇九・九〇五）、男山の昔を思い出して自分の盛りのころをなつかしみ（八八九）、女郎花の盛りの短かさをくよくよとなげくのなどにも（一〇一六）、みな歌を詠ん

で心のなぐさめとしたのである。

また、春の朝に花の散るのを見、秋の夕暮に木の葉の落ちるのを聞き、ある時は年の加わること鏡にうつる白髪のと、皺の波とを悲しみ、草の葉におく露、水にかぶ泡をみて自分もそのようにもろいものかと驚き、ある時は、昨日は栄えおごっていた者が今日はおちぶれ（八八八・九三三）、世の中にくらすのがわびしくなり、親しかった人も間が遠くなり、あるいは松山の波をたえて恋する人に誓いをかけ（一〇九三）、野中の清水を汲んでは昔を恋い（八八七）、秋の萩の下葉が紅葉しはじめる夜ねむれずに人を恋い（二三〇）、暁の鳴の羽がきの音を数えて久しく訪ねて来ない人を恋い（七六一）、人生のつらいことを人に言い（九五八）、吉野川をたとえにして夫婦の愛情をうらむ心を歌って来たのであるが（八二八）、今は、昔立ちのぼっていた富士の噴煙も立たなくなり、昔の長柄の橋もふたたび造る時になったのだと聞く人は（八九〇）、それらのことの詠まれている歌によつてのみ、昔をしのんで、心をなぐさめるのである。

五 歌の歴史の批評、万葉時代

昔からこのように伝わっているなかでも、平城天皇の御代から歌はひろまったのである。この御代には、歌の

本質をよく理解していられたようである。この御代に、正三位柿本人麿は歌聖であった。これは、歌の上で君と臣下とが合体したといえるであろう。秋の夕暮龍田川に流れる紅葉を、天皇の御目には錦と見られたが、春の朝吉野山の桜は、人麿の心には雲かとばかり思われた。また、山部赤人という人がいた。歌にかけては、この世のものと思われぬまでたくみであった。この二人をくらべると、人麿は赤人の上に立つてであろうことはむずかしく、また赤人は人麿の下に立つてであろうことがむずかしい状態であった。

この人々のほかに、またすぐれた歌人も御代御代に名が聞え、その時その時絶えずあらわれた。平城天皇より以前の歌を、人麿・赤人にあつめさせて、万葉集と名づけられた。

六 歌の歴史の批評、六歌仙時代

あの平城天皇の御代からこのかた、年で数えると百年あまり、天皇の代で数えると十代になった。このあいだ、昔の歌がどうであったか、歌の本質がどうであるかのわかる歌人は、わずかに一人二人にすぎなかった。そうであるけれど、それぞれ一長一短という有様で、人麿・赤人には及ばなかった。

今このことをいうのに、高位高官の人については、軽

率のようであるから言わない。それらを別として、近い世に歌人としての名のきこえている人は、僧正遍昭は、歌の風体は自分のものとしているけれど、真実な歌の心の足りないところがある。たとえていえば、絵にかいてあるうつくしい女を見て、それに空しく心をうごかすようなものである。

在原業平は、歌の心のほうが有り余っていて、それをあらわす言葉のほうが不足している。たとえば、しぼんでいる花の、色つやはなくなつて、においの残つていようなものである。

文屋康秀は、あらわす言葉のほうはたくみであつて、歌の風体はそのために不調和となり、びつたりと自分のものになつていない。たとえていえば、商人がよい着物をきていようなものである。

宇治山の僧喜撰は、いいあらわす言葉つかいが幽かですく、一首の歌のはじめおわりがたしかでない。たとえば、秋の月をながめているとき、暁の雲にあつて隠れたようなものである。この人の詠んだ歌は世間に多く知られていないから、それやこれやの歌によつて、まとめては理解ができない。

小野小町は、昔の衣通姫すかひぬすめの系統の人である。歌の心はやさしく、身にしみるようで、歌の姿はつよくない。たとえば、うつくしい女が病気になやんでいるところのあ

るのに似ている。強くないのは、女の歌だからなのである。

大伴黒主は、歌の心はおもしろいが、歌の風体はいやしいところがある。たとえば、薪を背負った山働きの人が、うつくしい花の蔭でやすんでいるように、不調和だ。

このほかの人々で、歌人としての名のきこえているのは、野に生えている葛の這ひひろがるように、世の中にひろがっており、林に上げられている木の葉のように多くあるけれど、それらの人々は、歌とばかり自分自身は思っていて、ほんとうは歌の本質は理解しないのだろう。

七 古今和歌集のできた事情

ところが、今天皇が国をおさめられることは、九年にわたった。ゆきわたらぬところもない御いつくしみの波は、日本の島々のそとまで流れてゆき、ひろい御めぐみの蔭は、筑波山の麓よりも繁くいらっしやうて、万政をおとりになられる暇に、文化の方面をもお忘れにならぬあまりに、昔のことも忘れまい、古くあったことも再興なさるうとして、今もごらんになり、後世にも伝われとお思いになられて、勅撰集の事業を思い立たれ、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則・御書の所の預・紀貫之・前の甲斐の少日凡河内躬恒・右衛門の府生壬生の忠岑ら

に仰せられて、万葉集にはいつていない古歌、また自身の歌をもたてまつるようになせられた。

これらの歌の中にも、梅を折ってかざしとする春の歌よりはじまり、郭公を聞く夏の歌、紅葉を愛でて折る秋の歌、雪を見る冬の歌にいたるまでの四季の歌、また命の長い鶴亀にたとえて君の年齢を思い、人をも祝う賀の歌、また秋萩夏草を見て妻を恋う恋の歌、逢坂山に来て手向の神に折る器旅の歌、離別の歌、あるいは春夏秋冬の部類にもはまらないさまざまな歌を撰ばせられた。全部で千首、二十巻、名づけて古今和歌集という。

八 古今和歌集を祝う言葉

このように、このたび集め撰ばれて、歌は山の下を流れる水のように絶えぬものとなり、浜の砂のように数多くつもったので、今は飛鳥川の瀬のようにかわりやすく、人に知られないものに変ってしまった恨みも聞えることなく、小石が岩に成長するように永遠にさかえてゆくよるこびばかりが存在することとなるう。

さて、われは、歌の言葉は、春の花のようなくししい匂いはすくなく、実際のともなわれない名声ばかりが高いのをなげいて来ているので、このたびの歌集の撰者として重任にあたるについては、一方では世の人に聞かれるのをはばかり怖れ、一方では歌そのものに対して恥か

しく思っているけれど、起ち居や起き臥しにつけて、貫之らがこの世におなじく生まれあわせ、勅撰和歌集の撰ばれる時に会ったことをよろこびとしている。

人麿はすでに世を去ったけれど、その生きていた時、事にあたった勅撰和歌集編纂は、この世にとどまっている。たとえ将来、時は移り事は去って、楽しみがゆき悲しみがきて、世の中の移りかわりがあるとも、もしこの歌集が、青柳の糸のように長く絶えることなく、松の葉のように散ってなくなることなくて、まさきの葛ワヅのように長く後世につたわり、鳥の足跡のように久しくとどまっていたならば、歌の風体を知り、勅撰和歌集の本質を知るであろう人は、大空の月を見るごとくに、この歌集におさめられた古い歌を仰いで見、今の歌を恋いせずにはいられないであろう。

古今和歌集 卷第一 春の歌 上

二条の後の詠まれた春のはじめの御歌

十二月中に立春をむかえた日

在原元方

1 年のうちに春は来にけり一年を去年とやいはむ今年とや
いはむ (年内に春は訪れて来た。春が立った以上、この一年を、去年といったものか、今年すなわち新年といったものか。)

立春の日に詠んだ歌

紀貫之

2 袖ひぢてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風や解くら
む (過ぎさった夏、袖も濡れて、手にすくって遊んだ水の、冬となり凍っていたのを、立春の今日吹く風は、解かしているであろうか。)

題しらず

よみ人しらず

3 春霞立てるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ
(春霞の立っているのはどこであろうか。このミヨシノノ吉野の山には、冬のままに雪が降りつつづけている。)

4 雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙いまや解くらむ
(冬のままに雪のある中に、春は訪れて来た。春を待ち侘びて鳴く鶯のこぼす涙の、寒さにこおっていたのが、東から吹く風に今日は解けているであろうか。「二条の后」は藤原長良女、高子。清和天皇の皇后。)

題しらず

よみ人しらず

5 梅が枝に来ある鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ
(梅の花の咲く枝に来ている鶯は、冬から来て、今春へわたって鳴いているけれども、冬のもの雪は未だ降りつつづいている。)

雪が木に降りかかったのを詠む 素性法師

6 春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞ鳴く
(春が立ったので、花と見るのだろうか。白雪の降って、かかっている枝に、鶯が鳴いている。)

題しらず

よみ人しらず

7 心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆ
らむ (志を深くも花に染ませていたので、春の日に消えようとして消えきらぬ遠山の雪が、花と見えるのである)

う。

或る人がいう、前太政大臣（藤原良房）の歌である。

二条の後を、まだ東宮の母御息所とおよびしていた時、正月三日、御前に召して仰言のある間に、折から、日は照りながら雪の頭に降りかかったのを題に歌を詠めと仰せられたので
文屋康秀

8 春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

（春宮の御眷顧をたまわる恣い私ではございませぬが、老年となり頭が雪のように變つて来ることだけが、佗しゅうございませぬ。「東宮」はのちの陽成天皇。）

雪の降つたのを詠む

紀貫之

9 霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける
（霞が立ち木の芽も張る、その春の雪が降ると、花のない里までも花の散ることである。）

春のはじめに詠む

藤原言直

10 春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな
（春の来方がはやいのか、花の咲き方が遅いのかと、聞いて理解しようと思う、その何よりもまず来るべき鶯までも、鳴かずにいることよ。）

春のはじめの歌

壬生忠岑

11 春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ
（春が来たと人は言うけれども、鶯の鳴かないうちは、自分は春が来たのではあるまいと思う。）

寛平の御時（宇多天皇）、後の宮の歌合の歌

源当純

12 谷風に解くる氷のひまごとに打出づる波や春の初花
（谷の風によって解ける谷川の氷の裂目毎に、氷の下から奔り出る川波は、春の第一番に咲く花であろうか。）

紀友則

13 花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる
（梅の香を、風の訪れてゆくのに添えて、冬のまま谷にいる鶯を誘い出す案内に遣る。）

大江千里

14 鶯の谷より出づる声なくば春来ることをたれか知らまし
（鶯の、谷より出て鳴く声が無かったならば、春の来ていることを、誰が知るであろうか。）

在原棟梁

15 春立てど花もにほはぬ山里はもの憂かる音に鶯ぞ鳴く
 (春が来ても梅の花も咲かぬ、春の遅い山里は、ものぐさい音で鶯が鳴くことだ。)

題しらず

よみ人しらず

16 野べ近く家居しをれば鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く
 (野に近く住居しているので、鶯の鳴くところの声は、朝朝聞いている。)

17 春日野は今日はな焼きそ若草のつまも籠れり我も籠れり
 (春日野だけは、今日だけは焼くな。草の中にワカクサノ妻も籠っている、われも籠っている。題または作者名のない歌は、前の歌と同じ。したがってこの歌は題しらず、よみ人しらずである。以下同様である。)

18 春日野の飛ぶ火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ
 (春日野の飛ぶ火野の野守よ、野に出て見てくれ。もう幾日してから若菜を摘むようになるだろう。「飛ぶ火」は烽火で、ノロシ。その設備のある野が飛ぶ火野。奈良の春日におかれたのは和銅五年。)

19 み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり
 (山では、松の上の雪でさえ消えないのに、都では野の若

菜を摘んでいることよ。)

20 梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ
 (梓弓を押して張る、そのハルという春雨が今日降った。明日もこの上に降ったならば、伸び立つ野の若草を摘むようになるだろう。)

仁和の帝(光孝天皇)がまだ皇子でいられた時、若菜を人に賜わった時に添えた御歌

21 君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ
 (君に贈ろうと、春の野に出て若菜を摘む、私の袖の上に、雪は降りつつづいてる。)

歌を奉れと仰せられた時、詠んで奉る

貫之

22 かすが野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ
 (春日野の若菜を摘みに、白い衣の袖を振って、仲間を手招きして、わざわざあの処女らは行くのであろうか。)

題しらず

在原行平朝臣

23 春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ
 (春に着るところの霞の衣は、緯糸が弱くて、強く吹く嵐

だけには、破れるようである。「春のきる體の衣」は春を擬人する。「ぬぎを薄み」は織物の横糸が弱いので。縦糸と横糸とで織物はできている。）

寛平の御時（宇多天皇）、后の宮の歌合に詠む

源宗于朝臣

24 ときはなる松の緑も春来れば今一しほの色まさりけり

（いつも変わらない松の緑の色も、新しい葉の萌える木と同じに、春となると、さらに一染め色が濃くなったことだ。）

歌を奉れと仰せられた時に、詠んで奉る

貫之

25 わが背子が衣はる雨降る毎に野辺の緑ぞ色まさりける

（わが夫の衣を張る、そのハルという春雨の降るごとに、野辺の草は育てられて、緑の色がひたすらに増さって行くことよ。「わが背子が衣」は、張ると春とが同音の關係で、春雨を修飾する序詞。）

26 青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花の綻びにける

（青柳が長い枝の糸を、風に靡かせて繕り合せて、物を縫う用意をしている春には、衣の乱れに花は咲き乱れ、衣の綻びに花は綻びたことよ。「糸よりかく」「乱れ」「綻び」に街路樹の柳桜の美しさと、人間の裁縫の姿とをか

らませている。）

西大寺のほとりの柳を詠む

僧正遍昭

27 浅緑糸よりかけて白露を玉にも貫ける春の柳か（薄緑の糸を繕り合せて、白露を玉としてつらぬいた、春の柳かな。）

題しらず

よみ人しらず

28 もも千鳥さへづる春は物事にあらたまれども我ぞふり行く（多くの様々の小鳥の囀る春は、一切の物は改まって新しくなるが、この自分だけは老いて古くなってゆく。）

29 をちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな（あちこちの見当も知られぬ山中に、心もとなくも相手を呼ぶ呼子鳥よ。）

帰る雁の声を聞いて、越の国へ行った人思って詠む
凡河内躬恒

30 春来れば雁かへるなり白雲の道行きぶりに言やつてまし（春が来たので、雁は故里の北の国へ帰るのである。雲路を行く序に、越の国の友に言伝を頼もうか。）

帰る雁を詠む

伊勢

32 春霞たつを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる
(やがて花が咲くのであるが、春霞の立つのを見捨てて北へ帰る雁は、花のない里に住み慣れて、花の美しさを知らないのか。)

題しらず

よみ人しらず

33 折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く
(折ったので、その移り香にこの袖は匂うのだ。それを、梅の花があると思うのか、このわが袖に、鶯が慕いよって鳴く。)

34 色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも
(色よりも香の方が愛でたく思われる。どういふ方の袖が触れて、その燻香の移り香を留めている、この宿の梅であるぞ。)

35 宿近く梅の花植えじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり
(軒近く梅の花は植えまい。つまらなくも、匂い来る香を、待つ人の燻香の香に間違えさせられたことだ。)

36 梅の花たち寄るばかりありしより人の咎むる香にぞ染みける
(梅の花に、近く立ち寄るほどのことがあったので、妻の、移り香ではないかと咎めるその香に、深く染

まったことよ。)

梅の花を折って詠む

東三條左大臣

37 鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと
(鶯がその笠に作るという梅の花は、私も折って髪に挿そう、若やく鶯にあやかって、この老いた顔が隠れようかと思つて。)

題しらず

素性法師

38 よそにのみあはれとぞ見し梅の花飽かぬ色香は折りてなりけり
(離れてのみ眺めて、愛でたいものと見ていた梅の花よ。いくら愛でも愛で足りぬ色香は、手に折って見てのことであるよ。)

梅の花を折って人に贈るのに添えた歌

友則

39 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る
(君でなくて、誰に見せようか、この梅の花を。愛でたいこの色も香も、これを理解できる君だけが理解するのだ。)

くらぶ山(鞍馬山)で詠む

貫之

40 梅の花匂ふ春べはくらぶ山圍に越ゆれどしるくぞありけり

る（梅の花の匂う春には、くらぶ山を闇夜に越えるけれど、匂いによつて、眼には見えぬが、梅の花の咲いているのがはつきりと解ることだ。）

月夜に梅の花を折つて欲しいと人がいったので、折ろうとして詠む
躬 恒

40 月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける（月夜には、月の光にまぎれて、それが白梅の花とも見分けられない。梅の花は、香を尋ねて行つて、その在り場所を知るべきであるよ。）

春の夜、梅の花を詠む

41 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくる（春の夜の闇というものは理が立たない。梅の花は、闇のために色の方は見えぬが、香の方は隠れようか、隠れはしない。）

奈良の初瀬はつせに参詣まじりするごとに宿ることにしていた人の家に、久しく宿らなくて、時がたつてのち訪れると、その家の主人は「このようにたしかに宿はあります」と家の中からいうので、門口に立っていた梅の花を手折つて、添えて詠んで贈った歌

貫 之

42 人はいさ心も知らず故里は花ぞ昔の香かに匂ひける（人の方は、さあどうだろう、心も知られない。しかし故里の方は変ることなく、この花は昔のままの香に匂っていることです。）

水のはとりに梅の花の咲いているのを詠む

伊 勢

43 春毎に流るる川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ（これからの春ごとに、いまのように、流れる川に映る花の影を、まことの花と見誤つて、折ることのできぬ川水に、袖が濡れることだろうか。）

44 年を経て花の鏡となる水は散りかかるをや曇るといふらむ（幾春もの間を、花のための鏡となつている川水は、花の散つてかかるのを、鏡に塵のかかるように、曇るといふのであろうか。）

家にあつた梅の花の、散つたのを詠む

貫 之 〇

45 暮ると明くと目離れぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ（暮れるといつては、明けるといつては、常に目から離さずにいるものを、梅の花は、いつの人のいぬ間に、散つたのであろうか。）